

「きょう よう 今日、用がある場所」

～老人福祉センターから介護予防を考える～

神奈川県横浜市
 社会福祉法人横浜市社会福祉協議会
 老人福祉センターユートピア青葉 横浜市もえぎ野地域ケアプラザ
 ○片桐明日美 木村富子 門脇宣幸

1 はじめに

女優樹木希林さんの名言にこんなことばがある。

「今日、用事があること（きょうよう）を『今日用』と言っているんだけど、神さまがお与えくださった『今日用』に向き合うことが毎日の幸せなのよね。『今日用』をこなす事が、人生を使い切ったという安堵につながるんじゃない？（笑） 映画「うまれる。ずっといっしょ」より」

日々 200 人を超える高齢者の来館を受けると、この言葉がリアリティをもって問いかけてくる。

「老人福祉センター」は（以下、老福）老人福祉法に基づく高齢者施設である。このセンターでの現状をふまえ、「今日も用がある場所」としての在り方を考えていきたい。

老人福祉センター 設置要綱

老人福祉センターは、地域の老人に対して、各種の相談に応ずるとともに、健康の増進、教養の向上及びレクリエーションの為の便宜を総合的に供与し、もって老人に健康で明るい生活を営ませることを目的とする。
 昭和52年 社会局長通知 社老第48号より抜粋

利用対象（横浜市の場合）

- ・市内にお住いの60歳以上の方および付添い者
 - ・市内にお住いの方の60歳以上の父母及び祖父母
- ※利用証（利用資格が確認できるもの）を作成すれば市内全館共通で利用できる。

個人利用

個人利用として開放している部屋を開館時間内自由に無料で利用できる。

- ・浴室（無い館もある）
- ・大広間（演芸＝カラオケや踊り）
- ・娯楽室（囲碁・将棋ができる）

団体利用

事前に登録をして、部屋を利用できる。

趣味の教室・講座への参加
 原則無料。教材費のみ実費で徴収することがある。

横浜市 老人福祉センターのごあんないより抜粋

「ユートピア青葉」について 横浜市青葉区もえぎ野4-2（東急田園都市線 藤が丘駅徒歩7分）
 9時～17時開館／月1回休館日以外は土日祝日も開館／平均来館者数 一日延べ250人
 館長1名、職員1名の他、「コミュニティスタッフ」（以下、コミスタ）を地域から採用し16名配置。
 横浜市内では唯一の「地域ケアプラザとの複合館」で、両施設とも指定管理により横浜市社会福祉協議会が受託運営。

趣味の教室やレクリエーションの機会を提供する場であるから、利用者が自分で自分のことができるのはあたりまえ、むしろ介助が必要になれば老福は使えない（＝適切な介護を受けられる他機関へ）というのが市内各センターで共通のとらえかただった。しかし、ここ数年状況が変わってきている。趣味の講座をただ提供するだけの場としては難しくなってきた。

常連の利用者が、まっすぐ歩けていないことに気づいた

団体の代表者から、メンバー内に認知症と思われる方がいて、対応に悩むと相談を受けた
玄関先でたびたび鍵をなくしたと大騒ぎになっている

このような状況に対し、横浜市社会福祉協議会の運営施設としてどういった対応ができるか、地域ケアプラザと複合館の当センターでは、昨年から見守りの取り組みをはじめた。

2-1 事例の紹介「きっかけになったケース」

毎日カラオケに来ているSさん（70代・男性）のケース

10年来の常連利用者であったSさんが長期入院の為、しばらく顔を見せなかった。ある日半ばりにバイクで来館、うまくとめられずにバイクごと転倒。入館したものの、廊下をまっすぐ歩かず再び大広間前で転倒。以前とちがう様子にスタッフ一同、対応に悩んだ。このことをきっかけに、見守り体制の模索がはじまった。

まずは、気になることを記録に残すようにした。また、対応に困ることも日々の日誌で共有していった。

担当の包括支援センター（以下、包括）から連絡有。Sさんがサービス拒否がある旨、入院中からユートピアへ行きたいと強く要望されていたと伺う。今後共に見守っていくことを確認。

ある日頭から血を流しながら来館。それでも病院へは行かず大広間に毎日来たいと。保健福祉センターの高齢者担当・担当包括職員が来館し、老福職員とともに大広間でSさんに声掛けを行った。

施設入所が決まったとの連絡。半年後、亡くなられたとの連絡。

当時の記録より

今日はカラオケの歌詞を頻繁に間違える
甘味たくさん買われて売店から困惑の声
ファミレスで朝5時から路上駐車
今日もおなじズボン
カラオケの声が日に日に小さくなる
車の中がごみだらけ、
立って歌えなくなった イス必要
センター柱に車衝突
眼鏡のレンズ片方無い…

毎日来るから
小さな変化にも気づく。

包括の持っていた情報と、老福の持っていた情報が合わさり、本人の生活状況が多面的に明らかになってきた

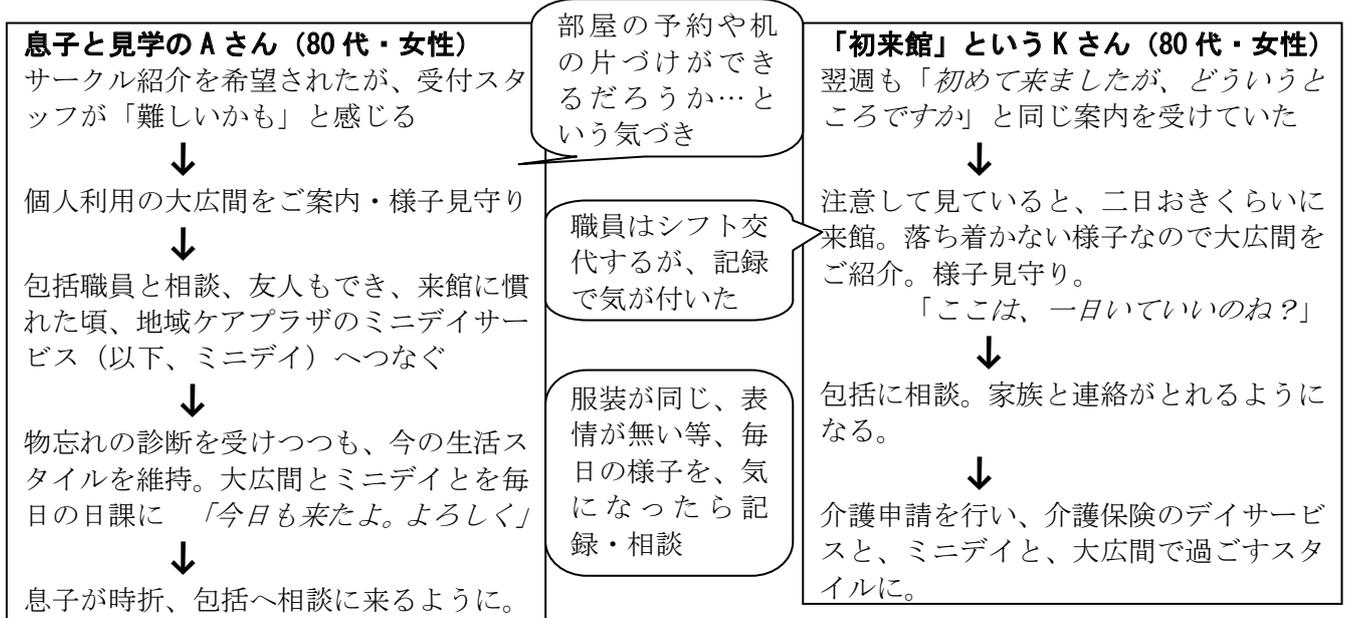
バイク・車の運転について警察にも相談

専門職ではないコミ
ュニティスタッフとしての気づきを報告

自宅訪問時と、大広間にいるときでは顔が違くと区役所職員。いきいきしているSさんを見て、「老福だからできること」、また「老福の限界点」「いつサービスにふみきるか」を三者で話し合う。

「ここしか行くところがない」と話されていた。
「雨でも日曜でも、一日中いられるから」
「休館日はね、さみしくて」

2-2 日々のつながり



3 考察

以上のケースから、これからの老福の在り方が見えてきた。地域の一員でもあるコミスタだからこその関わりがある。住民の視点、日々の暮らしの観点から利用者に対応ができ、サービスありきでない狭間の人の居場所が提供できる。また、利用者にとっても、生活の中の選択肢として老福があることで、地域生活の安定をはかることができるのではないか。

利用者にとって

- ・好きなときに無料で来られる場所
- ・行けば馴染みのスタッフがいるから、一人でも安心。
- ・おしゃべりしたり、時にはケンカでしたり、フォローしてくれる友人が毎日いる。
- ・介護保険? 訪問? そういふのは嫌だね。

職員にとって

滞在時間が長いからこそ些細な変化に気が付く→でも、今までどうしたらいいかわからなかった。包括に相談したら、対応が見えてきた! 地域の高齢者を住民として見守っていくことができる

今日、用のある場所



「明日もここで会いましょう」

ユートピア青葉は、市内でも唯一の「ケアプラザとの複合館」である。両館とも、横浜市社会福祉協議会が運営していることを強みに、日々気になることを記録しはじめた。今年度からは、5職種会議を定例でスタート。老福職員、地域ケアプラザ職員(地域活動交流職員・包括3職種職員)に青葉区社会福祉協議会も加えて、毎月1回情報交換を行っている。

もちろん、包括とのつながりができても毎日「どうしたらいいか」は模索中である。本人の生活や趣味を保ちながらどこまで来館を支援できるか、とりまく周囲の利用者の思惑もあり、日々対応に追われスタッフみんなで悩む。解決のひとつとして、ケアプラザと共催で介護予防事業も行っている。老福ならではの豊富な趣味の教室講師陣を活かして、編み物やハガキ絵、また太極拳やダンスを取り入れた講座などだ。どの利用者也老福に「ふだんの中での居場所」を求めている。介護・予防という言葉を使わない事業をいかに提供できるかが課題である。

高齢者が自分の意志で自由に過ごせる場所として、そして市社協の運営する施設として、今日もまた力をあわせて悩んでいきたい。「今日、用がある場所」を提供しつづけるために。